特集論文

スポーツと学校教育
――これまでの体育学はどう論じてきたか

中澤 篤史
（一橋大学大学院社会学研究科 専任講師）

1. はじめに

本誌編集部は今回、スポーツを特集するに当たって、「スポーツと学校教育」というテーマを設定している。このスポーツと学校教育というテーマについて総論的に研究動向を紹介すること、言い換えると、スポーツと学校教育の関係や結び付きがこれまでどのように論じられてきたのかを整理することが、編集部から筆者に与えられた本稿の課題である。

筆者は、体育学という学問的立場をベースにして、スポーツと学校教育の関係や結び付きを、運動部活動を具体的な分析対象としながら研究してきた。その成果は、2014年3月に『運動部活動の戦後と現在――なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（青弓社）として上梓した。そこで展開した筆者オリジナルの実証的分析や理論的考察を紹介することは同書を読んでいただくことを願って割愛し、本稿では、その前提となる研究動向、すなわちこれまでの体育学がスポーツと学校教育の関係や結び付きをどのように論じてきたのかを検討する。

ところで、読者は、スポーツを考える上で「スポーツと学校教育」というテーマを設定すること自体を、どう感じるだろうか。おそらく、学校の運動部活動に慣れ親しんだ多くの日本人読者にとっては、スポーツを学校教育に結び付けて考えることに違和感はなく、こうしたテーマ設定は自然に映るのではないだろうか。日本の学校教育には運動部活動があるし、その運動部活動にスポーツと学校教育の結び付きを容易に見いだすことができるからである。そうした見方からすると、スポーツを考える上で、学校教育との関係や結び付きは、無視できない論点であるように思われてくる。

しかし、国際的に見ると、そうとは限らない。実は、運動部活動が日本ほど大規模に成立している国はほかにない（文部省 1968; Bennett et al. 1983; Weiss and Gould eds. 1986; Flath 1987; Haag et al. eds. 1987; Wagner ed. 1989; De Knop et al. eds. 1996）。欧州や北米では、学校ではなく地域社会のクラブが青少年のスポーツを提供するのが一般的であり、学校に運動部活動がある場合も、日本に比べてその規模は小さく、教師のかかわりも極めて弱い。そこでは、スポーツが学校教育と切り離されてきた。そうした国際的状況を鑑みると、スポーツを考える上で学校教育との関連はそれほど大切な論点にはならない、という見方も成り立ちうる。その見方から再び日本に目を転じてみれば、あらためて、なぜ日本ではスポーツは学校教育に結び付けられるのか、と問い返すこともできるだろう。

それでは、スポーツと学校教育にはどんな関連があるのか、そしてなぜ日本ではスポーツは学校教育に結び付けられるのか。これまで、こうした問いにもっとも取り組んできた学問領域が、体育学である。体育学とは、「身体教育の学」を語源とした、教育学の下位分野に位置する学問領域である。では、体育学は、スポーツと学校教育の関係や結び付きをどう論じてきたのか。論を先取りすれば、体育学は、スポーツと学校教育の間に矛

盾があることを指摘しつつ（2節）、その矛盾を乗り越えようと、3つの図式でスポーツと学校教育の結び付きを議論してきた（3節）。しかし、筆者の見解によれば、こうした既存の体育学的議論はスポーツと学校教育の関係や結び付きを十分に説明・理解できておらず、問題点も抱えている（4節）。以下で、順に詳述しよう。

2. スポーツと学校教育の矛盾

まず体育学は、スポーツと学校教育の間に矛盾があることを指摘してきた。そもそも、なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか、という問いが体育学にとって重要な探究対象となりえたのは、内容的にスポーツと学校教育に関連がないように思われるからというだけでなく、原理的に考えてみても、両者が結び付くことに矛盾が生じうると考えられてきたからである。はじめに、その矛盾とは何だったのかを確認しておきたい。

スポーツは、身体を使った一種の遊戯であると見なされてきた。スポーツの語源は、「運び去る」を意味するラテン語のdeportareであり、単に物質的な運搬・移動という意味だけでなく、日常的な生活や仕事を離れる身体的・精神的な解放、すなわち「遊戯」という意味を含んでいた。それゆえ、学術的なスポーツ概念の定義も、この「遊戯（play）」を中心要件としてきた。スポーツ史学者のジレ（Gillet 1948＝1952: 9-20）は、スポーツを「遊戯」「競争」「激しい肉体的活動」という3要素から定義し、遊戯を第一の要素に挙げている。また、スポーツ社会学者のグートマン（Guttmann 1978＝1981: 7-29）も、「遊戯」を基底において、組織化された遊戯を「ゲーム」と定義し、競争するゲームを「競技」と定義し、肉体を使う競技を「スポーツ」と定義した。つまりスポーツは遊戯のサブカテゴリーと見なされている。

では、遊戯とは何か。ホイジンガ（Huizinga 1938＝1973）は、遊戯を「真面目ではないもの」と大きく括った上で、遊戯の形式的特徴として「自由」「非日常性」「没利害性」「時間的・空間的完結性」などを挙げた。ホイジンガの議論を引き継ぎながら、カイヨワ（Caillois 1958＝1990）は、遊戯を、「自由な活動」「隔離された活動」「未確定の活動」「非生産的活動」「規則のある活動」「虚構の活動」の要件から定義した。とりわけ第一要件の「自由な活動」は重要であり、カイヨワ（Caillois 1958＝1990: 40）は、これについて、「遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう」と説明している。すなわち、強制されずに、本人自身が楽しむことが、遊戯の絶対条件であった。それゆえ遊戯としてのスポーツは、非強制的で自発的な自由な活動であると見なされることになる。

他方で、学校教育は、スポーツが持つそうした遊戯の性質と相容れない側面を持つ。遊戯を「真面目ではないもの」と括ったホイジンガの議論を踏まえれば、学校教育は、生活・仕事上の必要性や利害関係と切り離すことはできない「真面目なもの」である。仮に子ども自身が望まない場合でも、学校や教師は、子どもが生活や仕事に有用な知識や能力を得られるように、義務として勉強を強制したり、しつけや指導として介入する。そのように、一般的に学校教育は遊戯を認めない。だから、「遊んでいないで勉強しなさい」と教師は子どもを叱るわけである。

また、近代社会を批判的に再考しようとする諸研究は、周知の通り、近代になって整備された学校教育が権力装置であることを明らかにしてきた。近代社会は、子どもを、大人とは区別された独自の存在と捉え、教育的配慮をもって、学校教育という異質な空間に隔離する（Ariès 1960＝1980）。学校教育は、制度として、子どもに、自律的な学習を保障するのではなく、他律的な教育を強制する（Illich 1971＝1977）。学校教育は権力を行使し、子どもに規律を与え、子どもを訓練していく。そうした規律訓練型の権力を通じて学校教育は、子どもに力を与え能力を引き出しながらも、同時に、子どもを従順で服従する存在へ変えていく（Foucault 1975＝1977）。ただし、学校教育の権力は、少なくとも建て前としては、子どものために行使される。学校教育は、子どものために子どもに介入するのであり、その権力はパターナリズ

図表-1 江橋慎四郎によるスポーツ概念と体育概念の特色の整理

スポーツ	体育
1．自然発生的。	1．意図的、計画的に行われる。
2．活動それ自体のために行われる。	2．教育の一環として構成された体育の目標がある。
3．遊び、楽しみとして行われる身体活動の総称。	3．体育の目標を達成するためにふさわしい身体活動が、発育発達に応じて選択される。
4．しかし、遊戯に比較すれば、闘争、競技とが最大の努力に強調点がおかれ、最高度の技術の追求が目標となる。	4．すべての生徒・児童が対象であり、基礎的、共通的な事項の学習が主であり、心身健康な人間の形成が目標となる。
5．それぞれの特色を持った多様な種目から構成されている。	5．目標達成に寄与するスポーツ種目が選択され、また、体操、ダンスなどの身体運動によって構成される。

注：江橋（1979: 22）より引用

ムとして特徴づけられる。

これらを踏まえると、学校教育における学校や教師のパターナリスティックな教育的働きかけが、子どもの自由を制限し、遊戯そしてスポーツを成立させないかもしれない。逆に、遊戯そしてスポーツそれ自体を大切にしようと、子どもの自由を全面的に肯定すれば、一切の教育的働きかけが否定され、学校教育そのものが成立しないかもしれない。そう考えると、遊戯としてのスポーツが、その遊戯の性質と相容れない学校教育に結び付けられることに、原理的な矛盾があるようにも思われてくる。

これまでの体育学は、スポーツと学校教育の間のこうした原理的な矛盾を、スポーツと学校体育の矛盾、あるいはもっと普遍的なレベルにおけるスポーツ概念と体育概念の矛盾として指摘してきた。以下では、そのように論じた代表的な体育学者である、竹之下休蔵と江橋慎四郎の議論を見てみよう。

教育としての体育は、遊戯としてのスポーツと相容れないのではないか。ホイジンガやカイヨワの遊戯論を取り入れながら、遊戯としての体育のあり方を構想した竹之下休蔵（1972）は、その構想が抱える問題点を次のように述べている。

「スポーツは非日常的なことがら、体育は〈まじめ〉の領域のことがら、両者の関連を考える際の基本的な問題点がここに見いだされる。……スポーツは体育の手段となりうる。しかし、手段となったとき、形式上はともかくとしても、定義上スポーツから離れるのではないか。スポーツの手段化を進めることと、スポーツの特性を保持する工夫のどちらがより体育的なのか、1つの問題である。」（竹之下 1972: 164）

竹之下は、スポーツを体育の手段とすることに問題を感じていた。スポーツは非日常的なことがらであり、それを「真面目なもの」である教育や体育の手段とすれば、その瞬間にスポーツの特性が保持できなくなり、スポーツはスポーツでなくなってしまう、というわけである。

同じように、江橋慎四郎（1979）も、普遍的なレベルにおけるスポーツ概念と体育概念の違いを論じている。江橋は、スポーツ振興法、ミッチェナー、ジレ、国際体育・スポーツ協議会によるスポーツの定義などを参照しながら、スポーツと体育の特色を図表-1のように整理した。江橋によれば、スポーツは、「自然発生的」に、「活動それ自体のために」、「遊び、楽しみとして」行われる、目的的な活動である。対照的に、体育は、「意図的、計画的に」、「教育の一環として」、「心身健康な人間の形成が目標」となって行われる、手段的な活動である。

それゆえ、目的的な活動であるスポーツと、それとは別の目的に応じた手段的な活動である体育は、互いに相容れない部分を持つ。スポーツが自然発生的な遊びや楽しみである限り、意図性や計画性を備える体育とは相容れない。ま

た、体育が教育として人間形成の手段である限り、それ自体を目的とするスポーツとは相容れない[1)]。

これらの議論を踏まえれば、スポーツを学校教育の手段とすることの矛盾を理解できる。すなわち、遊戯としてのスポーツが、その遊戯の性質と相容れない学校教育に結び付けられることには、原理的な矛盾がある。とすれば、スポーツと学校教育が結び付くとは、いったいどういうことなのか。

3. スポーツと学校教育の結び付きを論じる体育学的議論の図式

では、これまでの体育学において、スポーツと学校教育の結び付きはどう論じられてきたのか。本稿では、スポーツと学校教育の結び付きに関する既存の体育学的議論の図式を、「人格形成論的図式」「身体形成論的図式」「スポーツ文化論的図式」という名称で類型化して紹介しよう[2)]。ただし、筆者の立場を明示しておくと、それらの体育学的議論は必ずしも成功しておらず、なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのかを十分に説明・理解するに至っていない、と筆者は考えている。そこで、以下の論述では、「人格形成論的図式」「身体形成論的図式」「スポーツ文化論的図式」の内容を紹介しながら、併せてそれぞれの論じ方が抱える問題点についても言及する。

(1) 人格形成論的図式

第1に、人格形成論的図式とは、スポーツは望ましい人間性や道徳性を育成するから学校教育に結び付く、というように、人格形成を目指す学校教育の一部分にスポーツを位置づける図式である。その歴史は、19世紀のイギリスのパブリックスクールで生まれた「アスレティシズム」に遡る（Mangan 1981）。ヒューズ（Hughes 1952）の著した小説『トム・ブラウンの学校生活』が描く通り、19世紀初期における学校間対抗スポーツは異常なほど熱気を帯びた。こうしたスポーツの過熱に対して、当初、多くの教師はそれが学校教育の成立を妨げると敵意を持って見なしていた。しかし、その後は徐々に学校教育の一手段と見なされ始めていった。19世紀中頃には、スポーツの場が運動や娯楽の場としてではなく、最も価値のある社会性や男らしい徳性を形成する場として評価され、人格形成のためにスポーツが積極的に奨励されていった（McIntosh 1952＝1960, 1963＝1991, 1979＝1983）。つまり、スポーツに人格を形成する機能を見いだし、人格形成のためにスポーツが利用された。

このように人格形成の観点からスポーツを学校教育に結び付ける議論は、戦前戦後の日本にも通底している。たとえば、国立体育研究所所長や文部省体育局長を務めた小笠原道生（1961）は著書『体育は教育である』の中で、次のように述べている。

> 「スポーツがわれわれの『人』としての修養に役立ち、スポーツは『人』を造るものであるという事は、誰が何と言おうと飽くまでも真実である。早い話が、われわれはスポーツに親しんだ人の中に、他に見られないような好もしい性格、優れた性格を持っている人が沢山にいる事を、直接の経験として知っている。そしてそれは明らかにスポーツの好もしい影響の結果であると見て間違いはない。」（小笠原 1961: 241-242）

小笠原は、「スポーツは『人』を造る」と論じた。こうした議論によって、スポーツは人格形成を目指す学校教育の重要な部分として位置づけられた。

しかし、この人格形成論的図式が依って立つ、スポーツは人格形成に有効であるという仮定は、成立するかどうかが不確かであり、それを無条件に認めることはできない。日常的な経験レベルにおいても、私たちは、運動部活動の部員による暴力、いじめ、犯罪が繰り返されてきたことを知っているし、「スポーツをすれば必ず良い人間になる」と素朴に信じていない。また、いくつかの実証研究の結果も、スポーツの人格形成への有効性を必ずしも支持していない。たとえば、運動部活動参加者と非参加者を比較した心理学的研究には、運動部活動参加が反社会的な逸脱を引き起こすとい

う報告もある（岡田 2009）。つまり、「スポーツが人格形成に役立つ」という命題は、実証されていない神話としての側面がある（Miracle and Rees 1994; Rees and Miracle 2000）。

これらを踏まえると、スポーツの人格形成への有効性を仮定した人格形成論的図式は、その仮定が成立するかどうかが不確かであるという点で、問題点を抱えている。

(2) 身体形成論的図式

第2に、身体形成論的図式とは、スポーツは発達や、健康、体力づくりといった身体形成へ有効であるから学校教育に結び付く、というように、いわゆる「身体の教育」にスポーツを位置づける図式である。上述の第1の図式は、人間性や道徳性を育む手段としてスポーツを副次的に評価するものであり、スポーツに直接関連する身体的要素を評価するものではなかった。これに異を唱え、身体的要素に注目し、身体の形成に価値を置いてスポーツを評価する立場が出てきた。猪飼道夫と江橋慎四郎は、「われわれは、教育の基礎として身体を考え、その身体の健康保持にとどまらず、積極的に諸機能の向上をはかる、すなわち『体力』の育成ということを体育の基礎と考えている」（猪飼・江橋 1965: 61: 猪飼執筆部分）と述べた。こうした体力づくりを中心とする体育観が意図したのは、従来のスポーツ技術の教授に専心する学校体育のあり方を反省し、医学・生理学的な観点から身体形成へ有効な運動の質と量を見極め、スポーツの枠組みにとらわれない運動プログラムを提示しようとする点にあった（猪飼・江橋 1965; 加藤ほか編 1970; 水野ほか 1973）。その意味で、身体形成への有効性を重視する猪飼や江橋は、スポーツと学校教育をいったん切り離そうとする意図を持っていた。

ただし、そうした意図とは別に、身体形成へ向けた学校体育を実現しようとする政策・実践段階に至ると、むしろスポーツは、体力づくりに必要であるとして、学校教育に強く結び付けられていった。政策的には、東京オリンピック開催と合わせて1964年に「国民の健康・体力増強対策」が閣議決定され、その後現在まで官民挙げて展開されてきたいわゆる「体力つくり国民運動」は、青少年の体力づくりに向けて、学校でのスポーツを強く奨励していった。実践的にも、正木健雄や城丸章夫を中心とした民間教育研究団体の教育科学研究会 身体と教育部会は、生産労働や生活向上のための「からだづくり」としての学校体育を構想し、そのための教材としてスポーツを積極的に活用しようとしてきた（正木 1975）。

しかし、この身体形成論的図式にも問題点がある。なぜなら、そこで敷かれているスポーツは身体形成へ有効であるという仮定とは真逆に、スポーツによる怪我や障害が後を絶たない現実があるからである。猪飼たちと同じ医学・生理学の立場から、武藤芳照は、運動部活動での子どもの怪我や障害の問題を指摘してきた。自明なことであるが、適度な運動は身体形成に好影響を与え、過剰な運動は悪影響を与えるのであり、スポーツはそのどちらにもなり得る。そして、しばしば、スポーツは学校教育と結び付けられたその時に、過剰な運動を引き起こしてしまう。武藤が警鐘を鳴らしたのは、教育的関心をもった大人が子どものスポーツへ介入することで、過剰な運動が引き起こされ、怪我や障害が生じてしまう事態であった（武藤 1987, 1989; 武藤編 1988; 武藤・太田編 1999）。いわば、身体を正しく形成するために、スポーツと学校教育の結び付きを断ち切る必要性が指摘されたわけである。

以上から、スポーツの身体形成への有効性を仮定した身体形成論的図式も、その仮定がいつも成立するとは限らない点で、問題点を抱えている。

(3) スポーツ文化論的図式

第3に、スポーツ文化論的図式とは、スポーツはそれ自体が文化的価値を持つから学校教育に結び付けるべきだ、というように、文化伝達装置としての学校教育を通じて学習され発展させられる文化としてスポーツを位置づける図式である。この第3の図式は、日本では、スポーツを身体形成の手段として体力向上を図ろうとする上述の第2の図式を、それが国家主義的であり、能力主義的

であり、資本主義的であると批判しながら、生まれてきた（中村ほか 1978）。この主張は、丹下保夫と中村敏雄を中心とした民間教育研究団体の学校体育研究同志会によって、「運動文化論」として展開された。運動文化論のいう「運動」の中心にあるのは、文化遺産としてのスポーツである。運動文化論は、過去世代が蓄積してきたスポーツ文化を受け継いで、その素晴らしさを学習し、さらにより発展させた形で未来世代へつないでいくことを目指し、その役割を学校体育に求めた。丹下は、この運動文化論の立場から、概念としての体育を、「運動文化そのものを追求し、それを継承し発展させることを目的とした教育活動」（丹下 1961: 144）と再定義した。具体的には、体育が担うべき教育課題として、「①だれにも運動文化の本質を体得させ、人間的な運動欲求をほりおこす。②運動技術の獲得上達と運動文化追求の価値の認識を意図的計画的に行なう。③運動能力の向上についての自覚とくふうをさせる。④現実生活の中でいかにして運動文化の追求を可能にするかを理解させる」（丹下 1975: 42）などを挙げた。

こうした日本の動向と類似して、アメリカでも、学校体育のあり方を再考する機運の中で、スポーツを文化として学習し、発展させていこうとする議論が出てくる。代表的な論者は、シーデントップである。シーデントップは、学校体育のあり方を、人格形成や身体形成のためではなくスポーツ文化のために変えていこうと、概念としての体育を、「競争的で、表現的な運動をプレイする個人の性向や能力を向上させる過程」と再定義した（Siedentop 1976 = 1981）。この再定義は、ホイジンガやカイヨワの遊戯論を援用したものであり、自由な遊戯としてのスポーツを学習し、さらに発展させる役割を担う教育として体育を捉えたものである。その後、シーデントップは、この遊戯としてのスポーツを中心に据えた体育のあり方を、「スポーツ教育」（Sport Education）として定式化した（Siedentop ed. 1994）。そこでは、「あらゆる形態のスポーツをすべての人に保障すること」を中心理念として、生徒を「プレイヤー」「熱狂的なスポーツ人」「有能なスポーツ人」に育成することが目指された（Siedentop ed. 1994: 4-5）。シーデントップの「スポーツ教育」も、「運動文化論」と同じように、スポーツをそれ自体価値のある文化であると見なし、学校教育を通じて、スポーツ文化を学習し発展させることを意図していた。

しかし、このスポーツ文化論的図式にも問題点がある。なぜなら、スポーツの文化的価値を強調する同じ文化論の内部から、スポーツの文化性を重視するからこそ学校教育から離れるべきだという、まったく対蹠的な規範も提出されてきたからである。代表的な論者は、スポーツ評論家の玉木正之（1999, 2000, 2001, 2003）である。玉木によれば、体育の授業で子どもにスポーツが教育として強制されることで子どもがスポーツを嫌いになってしまい、高校野球が教育的に意味づけられることで勝利至上主義などの弊害が生じてしまうという。玉木は、学校教育の枠組みがスポーツ文化の発展を阻害していると問題視し、スポーツ文化自体を発展させるためにこそ、スポーツを学校教育から分離すべきであると主張する。このように、スポーツ文化の発展のために学校教育や運動部活動を仮想敵として批判し、スポーツを学校教育から切り離そうとする主張は、玉木に限らず、多くの戦後体育学者にも共通するものであった（竹之下 1966, 1968, 1970; 前川 1967, 1975; 松田 1971）。これはつまり、スポーツと学校教育の結び付きを説明・理解するはずだった、スポーツの文化的価値という仮定から、スポーツを学校教育から切り離そうとする主張も生み出されていることを意味している。

これらを踏まえると、スポーツの文化的価値を仮定したスポーツ文化論的図式は、逆にスポーツを学校教育から切り離そうとする主張も生み出す点で、問題点を抱えている。

4. これまでの体育学的議論の図式に共通する問題点

人格形成論的図式、身体形成論的図式、スポーツ文化論的図式の個別の問題点は上述した通りであるが、最後に今後の課題として、それら既存

の図式に共通する問題点をあらためて指摘し、スポーツと学校教育の結び付きを考えるための方向性を吟味しよう。

第1に、既存の図式は規範理論としてスポーツと学校教育の結び付き方に規範を提示しているが、その反面で、スポーツと学校教育が結び付くという形而下の現象を社会科学的に説明・理解することに焦点が当てられていないという問題点がある。既存の図式は、現象を説明・理解するための科学理論という側面だけではなく、それ以上に、そうあるべきだという規範を提示する規範理論の側面を持っていた。人格形成論的図式はスポーツの人格形成への有効性を仮定し、身体形成論的図式はスポーツの身体形成への有効性を仮定し、スポーツ文化論的図式はスポーツの文化的価値を仮定し、それぞれの仮定から、スポーツを学校教育に結び付けるべきだという規範を提示してきたといえる。そうした規範理論は、当該規範からの距離を持って現象を評価・批判するが、現象自体を説明･理解することはできない。それゆえ、スポーツの人格／身体形成への有効性や文化的価値という仮定をいったん排除し、価値中立的な立場から、スポーツが学校教育に結び付けられるという現象自体に問いを投げかけ、それを社会科学的に説明･理解することが目指される必要がある。

第2に、既存の図式はスポーツと学校教育の結び付きを脱文脈的なものと見なしており、その結果として、両者の結び付きが文脈依存的で、歴史的・社会的に構築された可能性を見落としているという問題点がある。第1の規範理論としての側面とも関連するが、既存の図式は、スポーツと学校教育の結び付きを、あらゆる時代や国に普遍に妥当するべき脱文脈的なものと見なしてきた。しかし、実際は、スポーツと学校教育の結び付き方は、多様である。スポーツと学校教育が分離される時代や国もあり、むしろ密接に結び付く現代日本の方が特殊である。規範理論としての既存の図式は、こうした現象の多様性に対峙した時、スポーツが学校教育に結び付く場合を規範と合致していると評価し、スポーツが学校教育に結び付かない別の場合を規範と合致しないと批判するかもしれない。しかしそうした規範的な接近の仕方では、なぜ、ある場合にスポーツが学校教育に結び付けられ、別の場合には結び付けられないのかを、説明・理解できないのである。それゆえ、こうした多様性を説明・理解するためには、スポーツと学校教育の結び付きが文脈依存的であり、歴史的・社会的に構築されてきたと見なす必要がある。

第3に、既存の図式はスポーツと学校教育の結び付きを結果的に自明視するように論じており、両者の間にある矛盾と緊張関係そのものを議論していないという問題点がある。既存の図式は、スポーツの人格／身体形成への有効性や文化的価値を仮定しながら、スポーツと学校教育が結び付く事態を、機能的で親和的なものであり、自然で当然であるものとして捉えた。しかし、このようにスポーツと学校教育の結び付きを自明視すれば、これまで指摘されてきた両者の矛盾と緊張関係から目を背けることになってしまう。結局、理論レベルの課題だったはずのその矛盾と緊張関係そのものがどうなったのかが議論されず、その意味で、議論を回避あるいは後退させている。それゆえ、スポーツと学校教育の結び付きを安易に自明視せずに、なぜ両者が結び付くのかを、両者の矛盾と緊張関係そのものを含めて考えなければならない。言い換えると、スポーツと学校教育の結び付きが、緊張関係を内在化した形で、構築されてきたと見なす必要がある。

第4に、そのスポーツと学校教育の緊張関係に関連して、既存の図式は、スポーツを各目的に応じた手段として位置づけており、スポーツ自体が目的的な活動と見なされてきた点を十分に考慮していないという問題点がある。既存の図式は、スポーツを、より良い人格を育成するための手段、身体を鍛え上げるための手段、現状のスポーツ文化をより発展させるための手段、と捉えている。しかし、目的的な活動と見なされたスポーツを手段化してしまえば、もはやスポーツがスポーツでなくなるということが、まさに、これまで指摘されてきた矛盾であった。つまり、ここで問うべきなのは、そのようにスポーツを手段化した場合、目的的な活動であるというスポーツの特徴がどう

なっているかである。言い換えると、学校と教師は人格形成や身体形成やスポーツ文化発展の手段としてスポーツを扱おうとするが、まさにその時に、学校と教師はスポーツの目的的側面をどう扱っているかが、問われねばならない。スポーツと学校教育の緊張関係を、スポーツの目的的側面に焦点化して分析する必要がある。

スポーツと学校教育の関係や結び付きを十全に論じるためには、以上のような問題点を乗り越える必要があるだろう[3)]。

付記

本稿は、平成23～26年度科学研究費補助金若手研究（B）「学校運動部活動の歴史的展開に関する総合的研究」（研究代表者：中澤篤史）の研究成果の一部であり、拙著『運動部活動の戦後と現在――なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（中澤 2014）の序章・第1章（初出論文としては、「なぜスポーツは学校教育へ結びつけられるのか」『一橋大学スポーツ研究』32: 13-25, 2013）を元に構成したものである。

注

1）こうした概念上の対立から、体育哲学領域では、スポーツと体育はそれぞれ独立した概念であるという認識が定説となっている（前川 1981; 佐藤 1993）。それゆえスポーツを体育の手段に限定したりすることが問題であるのと同様に、スポーツを体育と同一視することにも問題がある。この問題は、実践的なレベルでいうと、遊戯としてのスポーツをありのままに教科体育へつなげようとした「楽しい体育論」の課題へと通底している。竹之下休蔵や佐伯年詩雄を中心とした民間体育研究団体の全国体育学習研究会が提唱し、1977年・1978年改訂の学習指導要領に盛り込まれた「楽しい体育論」は、知識偏重や人間疎外の教育の改善を意図して、遊戯としてのスポーツを教科体育へ直結させようと、「楽しむこと」を教科体育の目標に掲げた（日野 1998）。しかし、義務として課される教科教育の枠組みの中で、遊戯・スポーツ・「楽しむこと」を成立させるには原理的な矛盾を伴い、「楽しい体育論」は、実践レベルで課題を抱え込むことになった（菊 1998）。

2）この類型化は筆者独自の試みであるが、少し補足しておきたい。本稿のテーマであるスポーツと学校教育の関係に関連して、体育哲学領域では、身体と教育の関係が議論されてきた。そこでは身体と教育の関係が、「身体の教育」「身体による教育」「運動・スポーツの教育」などの呼称で類型化されてきた（前川 1948: 92-122; 岡出 1987; 友添 2009: 63-108）。それらと、筆者独自の類型化である「人格形成論的図式」「身体形成論的図式」「スポーツ文化論的図式」との異同や関連性は詳細に検討できていないが、大づかみに述べれば、「人格形成論的図式」は「身体による教育」に、「身体形成論的図式」は「身体の教育」に、「スポーツ文化論的図式」は「運動・スポーツの教育」に、それぞれ対応しているといえるだろう。

3）拙著『運動部活動の戦後と現在――なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（中澤 2014）は、ここで指摘した問題点を乗り越えようとした一つの試みである。関心をお持ちの方には、ぜひお読みいただきたい。

文献

猪飼道夫・江橋慎四郎，1965，『体育の科学的基礎』東洋館出版社.
江橋慎四郎，1979，「健康と身体の教育」江橋慎四郎・高石昌弘編『教育学講座14 健康と身体の教育』学習研究社，1-32.
小笠原道生，1961，『体育は教育である』不昧堂書店.
岡田有司，2009，「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響」『教育心理学研究』57（4）: 419-431.
岡出美則，1987，「スポーツと教育」中村敏雄・高橋健夫編『体育原理講義』大修館書店，110-119.
加藤橘夫・前川峯雄・猪飼道夫編，1970，『青少年の体格と体力』杏林書院.
菊幸一，1998，「楽しい体育の理論的・実践的問題」中村敏雄編『戦後体育実践論3 スポーツ教育と実践』創文企画，111-122.
佐藤臣彦，1993，『身体教育を哲学する』北樹出版.
竹之下休蔵，1966，「スポーツ・クラブの現状と問題」『体育科教育』14（5）: 2-5.
――――，1968，「学校における運動部の将来」『体育の科学』18（8）: 469-472.
――――，1970，「今こそ総合的な対策を」『体育科教育』18（5）: 2-5.
――――，1972，『プレイ・スポーツ・体育論』大修館書店.
玉木正之，1999，『スポーツとは何か』講談社.
――――，2000，「スポーツは、学校（教育の場）で行われるべきか？」『体育科教育』48（9）: 9.
――――，2001，『日本人とスポーツ』日本放送出版協会.
――――，2003，『スポーツ解体新書』日本放送出版協会.
丹下保夫，1961，『体育原理（下）』逍遥書院.
――――，1975，「体育科教育論争（下）」城丸章夫ほか編『戦後民主体育の展開 理論編』新評論，33-44.
友添秀則，2009，『体育の人間形成論』大修館書店.
中村敏雄・阿部生雄・加賀秀雄・早川武彦・村上修・高橋健夫・横山一郎・荒木豊，1978，『スポーツ教育』大修館書店.
中澤篤史，2014，『運動部活動の戦後と現在――なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』青弓社.
日野克博，1998，「昭和五二・五三年の学習指導要領改訂と楽しい体育」中村敏雄編『戦後体育実践論3 スポーツ教育と実践』創文企画，69-81.
前川峯雄，1948，『体育学の課題』教育科学社.
――――，1967，「学校体育における論争点」『学校体育』20（5）: 10-14.

————, 1975,「課外体育の展望」『体育の科学』25（9）: 582-586.
————, 1981,『現代保健体育学大系1 体育原理（改訂版）』大修館書店.
正木健雄，1975,「国民教育の建設と体育」城丸章夫ほか編『戦後民主体育の展開 理論編』新評論，114-126.
松田岩男，1971,「学校体育とスポーツ教室」『学校体育』24（10）: 10-11.
水野忠文・猪飼道夫・江橋慎四郎，1973,『体育教育の原理』東京大学出版会.
武藤芳照，1987,「スポーツ部活動に伴う障害の実態とその背景」今橋盛勝ほか編『スポーツ「部活」』草土文化，118-139.
————，1989,『子どものスポーツ』東京大学出版会.
————編，1988,『小・中学生への気になるスポーツ指導』草土文化.
武藤芳照・太田美穂編，1999,『けが・故障を防ぐ――部活指導の新視点』ぎょうせい.
文部省，1968,『外国における体育・スポーツの現状』.
Ariès, Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris: Plon.（＝1980，杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生』みすず書房.）
Bennett, B. L., M. L. Howell and U. Simri, 1983, *Comparative Physical Education and Sport*, 2nd ed., Philadelphia: Lea & Febiger.
Caillois, Roger, 1958, *Les Jeux et les Hommes*, Paris: Gallimard.（＝1990，多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社.）
De Knop, P., L. M. Engstrom, B. Skirstad and M. R. Weiss eds., 1996, *Worldwide Trends in Youth Sport*, Champaign: Human Kinetics.
Flath, A. W., 1987, "Comparative Physical Education and Sport"『体育学研究』31（4）: 257-262.
Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir*, Paris: Gallimard.（＝1977, 田村俶訳『監獄の誕生』新潮社.）
Gillet, Bernard, 1948, *Histoire du Sport*, Paris: Presses universitaires de France.（＝1952, 近藤等訳『スポーツの歴史』白水社.）
Guttmann, Allen, 1978, *From Ritual to Record*, New York: Columbia University Press.（＝1981，清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ.）
Haag, H., D. Kayser and B. L. Benett, eds., 1987, *Comparative Physical Education and Sport*, vol. 4, Champaign: Human Kinetics.
Hughes, Thomas, 1857, *Tom Brown's School Days*.（＝1952, 前川俊一訳『トム・ブラウンの学校生活』岩波書店.）
Huizinga, Johan, 1938, *Homo ludens*.（＝1973，高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社.）
Illich, Ivan, 1971, *The Deschooling Society*, New York: Harper & Row.（＝1977，東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社.）
Mangan, J. A., 1981, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*, Cambridge: Cambridge University Press.
McIntosh, Peter C., 1952, *Physical Education in England since 1800*, London: G. Bell.（＝1960，加藤橘夫・田中鎮雄訳『近代イギリス体育史』ベースボール・マガジン社.）
————, 1963, *Sports in Society*, London: Watts.（＝1991，寺島善一ほか訳『現代社会とスポーツ』大修館書店.）
————, 1979, *Fair Play*, London: Heinemann.（＝1983，水野忠文訳『フェアプレイ』ベースボール・マガジン社.）
Miracle, A. W., and C. R. Rees, 1994, *Lessons of the Locker Room*, Amherst: Prometheus Books.
Rees, C. R., and A. W. Miracle, 2000, "Education and Sports," J. Coakley and E. Dunning eds., *Handbook of Sports Studies*, London: Sage, 277-290.
Siedentop, D., 1976, *Physical Education*, Dubuque: W. C. Brown.（＝1981, 高橋健夫訳『楽しい体育の創造』大修館書店.）
Siedentop, D. ed., 1994 *Sport Education*, Champaign: Human Kinetics.
Wagner, E. A. ed., 1989, *Sport in Asia and Africa*, New York: Greenwood Press.
Weiss, M. R. and D. Gould eds., 1986, *The 1984 Olympic Scientific Congress Proceedings (volume 10) Sport for Children and Youths*, Champaign: Human Kinetics.

なかざわ・あつし　一橋大学大学院社会学研究科専任講師。主な著書に『運動部活動の戦後と現在――なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（青弓社，2014）。身体教育学・スポーツ科学・社会福祉学専攻。（nakazawa.atsushi@r.hit-u.ac.jp）